
プレイボール プレイゲーム

なぞる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレイボール プレイゲーム

【Nコード】

N2011F

【作者名】

なぞる

【あらすじ】

双子の兄の身代わりに甲子園を目指す少女が入学した高校には野球部がなかった！？少女と弱小野球部の目指せ甲子園の話。(…嘘かもしれない)

第一話 入部届けがだせなくて

「うそつき！」

ばしっ、と盛大な張り手の音にびくりとする。

目の先には涙目で平手打ちする女の子と、打たれた男子生徒。

それをこっそり壁に隠れて見ている僕こと小野寺勝美。

(しゅ、修羅場!?)

別に僕に人の修羅場を覗く趣味などない。

なぜこうなったのかと言えば、本当に偶然だ。

野球部へ入部届けを出そうと活動場所だと言う、裏庭に行こうとした。

その通り道である、人気の少ない渡り廊下でこの修羅場に出くわしたのだ。

人気のない場所で話す男女の姿にただならぬものを感じて、思わず隠れてしまったのだが、二人ともこちらに気付かず、話を進める。

「あの時言ったじゃない！付き合ってくれるって！」

「…言っただけ？」

「なっ！言っただよ！卒業式の打ち上げで付き合おうって！」

(…ど、どうしよう!?)

一向に立ち去る気配のない二人に僕は迷った。

普通に考えれば、こんな会話聞いていいはずもない。

とつと立ち去るべきだ。だが、僕の目的地はここを通らなければ行けない。

入部届けを明日にしようかとちらりと考えた。だが、僕には高校生活を一日たりとも無駄にしたいくない理由がある。

今日出せないと言うことは、今日一日無駄にしたことになる。

実はこうして隠れている時間も惜しい。とりあえず一瞬だけ横を通してもらえれば、それでよいのだが、どう考えても今ここを通る勇氣は僕にはなかった。

しかも。ちらりと僕は二人の様子をうかがう。

女の子の方は知らない。セーラー服に緑のスカーフをしているので同年代だとわかるくらいだが、まだ入学して三日目の僕には他のクラスの女子の事までわからない。

だが、男のほうは誰だかわかった。こちらからは死角になっていて顔までわからないが、声に聞き覚えがあった。

のぶたか
延高 茉莉。僕と同じクラスの男子生徒だった。

入学式からクラスの女子だけでなく、他クラスの女子からも注目されまくっていた男だ。ちょっと甘めの顔立ちに少しだけ長めの茶髪。これだけ聞くと女っぽい感じだけど、ちっともそうじゃないのは長身で割りとがっしりとした体格だからだろう。進学校として名高い柏原高校は勉強ばかりしている生徒が多いせいか、男子の体格が少し細い。中にもがっしりしているものもいるが、珍しく、延高みたいな体格の良い生徒はどちらかと言うと珍しくてさらに目立つ存在でもある。

まあ、それだけでは決していないだろうけど、とっっても女子におモテになることは違いないだろう。同じ高校に通う友人からは大層中学時代から女の子をとつかえひっつかえ遊んでいたと言う情報も漏れ聞いている。

実際にまさか入学して三日目にしてこんなところで修羅場しているのだから、あながち嘘でもなさそうだ。

だが、なぜにこんなところで修羅場なんだよ！と僕は言いたい。人目を忍んで話すのなら何もここでなくてもいいはずだ。

確かに、ここは確かに中庭に用のある人間にしかほとんど通らない場所だ。中庭を使う人間はあまりいないとは聞いていた。だが、逆を言えば中庭を使う人間が確実に通る道でもあるはずなのだ。

それなのにここで何も話さなくてもいいじゃないか。その点で恋は盲目。人に見られてもいいと思っでんじやないかとこのカップルが思っている疑惑が湧いてくる。

そう悩んでいる間も、二人の会話はエスカレートしていく。

女の子！気付け！決してそいつは君を幸せにしてくれる男じゃないぞー！

こっそり見守っていただけのはずが、女の子に感情移入してしまっただせいか思わず身を乗り出しすぎてしまっていたのにそのとき僕は気付かなかった。

そうしている内に、最低男がするりと女の子から視線を外す。

その視線が、幾分ふらふらしていたかと思うと、突然僕としっかり目が合った。

男は視線の先に僕を見つけ、幾分驚いたような顔をしたが、その顔が突然にやりと凶悪な顔つきで笑った。

「っ！！！！！！！！！！」

慌てて壁の後ろに隠れなおしたが、どう考えたって、最早手遅れだった。

固まっていると男の声が聞こえてきた。

「…ごめんな。…実は…そうなんだ。」

先ほどとは違い、神妙な声に胡散臭さが増す。

「っ！うそ！誰よ！」

泣きながら、問い詰める彼女はその胡散臭さは伝わっていない。なんと鈍いのか。

とりあえず、このままここにいたらとてつもなく余計なことに巻き込まれそうな気がする。

入部届けは残念だが明日にするしかないだろう。

僕はそそくさとその場から逃げ出そうとしたときだった。

突然ポンっとなかまをつかまれた。

驚いて後ろを振り向くと、女の子を泣かしていた男の顔があった。なぜに、と思う間もない。

肩をつかまれ、体格差を利用された形で隠れた場所から引き釣り出されるみたいに、女の子に向きなおさせられる。男の手は僕の方にオンのまま。

一体何をさせられているのかわからず混乱するこちらを無視して、

目の前の女の子が青を通り越して白くなつた顔色でふらふらとふらついた。

気持ちわかる。いつそ僕も意識を飛ばしたい気分だよ。ふははははは。

「うそよ！うそうそ！茉莉君が！いやー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」
叫び声とともに女の子が走り去っていく。

「うん。じゃーねー。」
僕の肩を抱いたまま、男はそれにひらひらと手を振る。
僕は未だに固まっている。それを気にせず男が話し出す。

「……あの女ちよつとしつこくてさ。ちよつと一日付き合つたら随分のばせちやつて、いい加減別れたかつたんだよね。すぐ泣くし。うつつうしい。」

でも君が通りかかつてくれて助かった。」

にこりと笑いかける男にどう反応したらよいのかわからず、固まつたままできるとこちらをのぞきこんでくる綺麗な顔が目前に迫る。

「どうした？もしかして俺に惚れた？」

「っ！！！！！！」

考えるまもなく、自然に拳が唸りを挙げた。右ストレート。
綺麗に男の顔面に決まったそれを見届ける余裕もなく、僕はその場を逃げ去った。

第一話 入部届けがだせなくて（後書き）

新シリーズ開幕。

今回は現代。いえい！

他のシリーズ完結されるって？

まあ、気にしないで。

…お願いします。

第二話 病院の待合室

「ぶっわはははは、あはははははははー！ー！ー！」
病院の待合室に馬鹿笑いの声が響く。

ここは小早川第一病院の外科病棟の待合室だ。そして僕の目の前で笑い転げているのが僕の兄、小野寺巽だ。

少し癖のある黒髪につり気味の瞳。決して美形とはいえないが、愛嬌のある顔立ち。僕と同じ顔。体格もほぼ同じ。一緒に生まれた双子の兄だ。僕達の違いは服装と巽が着ける眼帯くらいだ。そっくり。時々両親ですら、どちらがどちらか間違える。

あまりの馬鹿笑いに通りかかった看護師さんから注意を受ける兄を尻目に僕は溜息をついた。

僕はあの、口に出すのもおぞましい出来事後、一目散に向かったのがこの病院だった。

そこで偶々検診に来ていた兄と出会い、今日の顛末を話したのだが。

「あは、ひやはははは…、はー、腹痛い…。」

涙を貯めて笑う兄に僕は流石に仏頂面になった。

「笑い事じゃなー！ーい！突然、頬にむっちゅつと…ぐあああ！思っ出しただけでも鳥肌が！？」

ぞぞぞ、と身震いする僕に、巽はまだ笑いを堪えている様な顔を向けた。

「いや、はは…。ふう。大変だったな。…その、ぶっ…お前、その姿のときに男に…ぶぶっ！」

また壺に嵌ったようにこちらを指差しながら笑い出す巽。失礼な。だが一度笑い出した巽に何を言っても無駄だと悟り、僕は自分の姿を見下ろす。

別におかしなところはないはずだ。黒の普通の学生服。へんなところなど何も無い。

見えている部分は。問題があるとするならば、この服の中身だろう。

「…はあ、しんど。お前といると、笑い死にぞ。」

漸く笑いが収まったのか、巽が涙目でこちらを見る。失敬な。

「別に巽を笑わせたくてひどい目にあっているんじゃないよ。偶然、偶々、運悪くだ！」

本当になんてアクシデントだ。ひどい目に会った上に、今日やるはずだった予定すべてパーだ。今更学校に戻っても、野球部は既に練習を終えて部員は帰っている。どの道今日の予定は完全に未消化に終わってしまった。

「はあ、時間がないのにな。」

頭を抱えていると、僕の頬に巽が手を差し入れてきた。驚いて兄の顔を見ると先ほどとは違い、心配そうな表情にぶつかる。

「だが、お前。その格好のときにそんなことされるなんて、やっぱり無理なんじゃ…。」

そろりと撫でられる頬の温かさにささくれだった気持ちさが落ち着く。昔からそうだ。普段はあまり意識しない兄弟関係を思い出す。腐っても兄か。

「…大丈夫だよ。ばれているって感じじゃない。それに多分今後も深く付き合うような相手でもないし、関係ない。どうせ半年。うまくやれるぞ。」

微笑んでやると、巽はどこか情けない顔をする。

「…苦労かけるな。」

「それは言いつこなしでしょ？」

頬に添えられた手のお返しに、巽の頬を軽く抓る。

「つぶ！」

少し崩れたその顔に今度はこちらが噴出し、今度は巽が仏頂面した。

「あにすんだよ。」

「いや、お兄ちゃん。面白い顔だと思って。ぶぶ。」

「同じ顔だろうが！うりゃ！」

「ぶひゃっ！」

今度はこちらの頬を抓られる。両頬を引っ張られて、痛さに思わず

涙目になる。

「ひひやいひひやい！」

「ふはははは！俺様の顔よりこっちの方がきつとずっと面白からう！ほうれ、ほれ。」

「ひゃび〜。」

そのとき僕達はお互いにじやれることに夢中で背後から近づく影に気付かなかった。

「巽。勝美をいじめるのはおやめなさい。」

ずびつ、と巽の頭に片手チョップが決まる。

「いてえ！」

盛大に痛がる巽の背後に紙袋を抱えた黒髪美人が立っていた。見覚えのあるその姿に僕は彼女の名前を呼んだ。

「ふわ、清ちゃん！」

越前清美。僕の親友にして、日本屈指のお金持ち越前グループの会長を祖父に持つお嬢様だ。

「勝美。さつき振りですわ。」

春先らしいパステルカラーのコートに黒く胸の上くらいまでのまっすぐな髪。黒目がちな濡れた瞳が艶やかに微笑む。

妖艶に笑う顔はとても同じ年とは思えない艶っぽさが感じられて思わず顔に血が上る。同じ高校で同じクラスなので今日の昼にももちろん会っていたのでさっきの台詞だった。

「いってえな！清美！それが、彼氏に対する態度か？襲うぞ。こら。」

「

ごすつ。」

合気道、空手、あわせて十段の清ちゃんの拳が巽の顔に直撃する。その見事さに惚れ惚れする。僕のにわか仕込みの拳も彼女仕込だ。

「おほほほ！そう言う口は人気のないところでほざけと言っているでしょう。」

お嬢様とは思えないぐりぐりと、巽の頭を押さえつけている清ちゃんの顔は耳まで真っ赤だ。

この二人が付き合いだしたのは本当にほんの二週間前くらいだ。

ずっと異のことが好きだったのは知っていたし、ずっと応援もしていたけど、極度の恥ずかしがりやの清ちゃんはなかなか思いの素直な伝え方を知らずに、ずるずると幼馴染の関係だけが続いていた。今も付き合い始めたといっても、彼氏彼女という言葉がひどく恥ずかしいらしく照れ隠しに異に当たっていたりする。微笑ましいことだ。

あの事故が原因だったにせよ、今二人が付き合いだしたのは単純に僕にとつては嬉しいことだった。

「…勝美も。そのにまにま笑いは止しなさい。」

顔を真っ赤にしている清ちゃんは可愛いな。だが、あんまり意地悪しているわけにもいかない。

「ごめんごめん。ところで、その紙袋頼んでた奴？」

「…勝美。兄に対する心配はなしかい？」

異がしくしくと目に手を当てている。うそ泣きなのはわかっているので無視する。

「そうですね。これ。適当に持ってきたのだけど、良かったかしら？」

受け取った紙袋の中を確認する。

「うん、大丈夫。ありがとう。」

望みどおりの中身に、相変わらず隙のない彼女の仕事を見て笑いかける。するとほっとしたように清ちゃんの顔も綻びる。

「さて、僕はそろそろ行くね。遅くなるかもだから、異は出来れば、清ちゃんが送ってって。」

「ええ。もちろんですわ。」

そう言う清ちゃんの顔は未だに赤いが幸せそうにとろけていた。

その顔に最近あんまりいいことのない身の回りで起きた一番幸せで最高の姿。

僕も嬉しくて微笑んだ。

「じゃ、言ってくるね。」

立ち上がり、紙袋を持っていこうとすると巽が僕を呼び止めた。

「勝美。」

「?なに?」

「…その。」

言いにくそうに言いよどむ巽の顔が情けなくて、胸が締め付けられて、思わず泣きたくなった。だがその心を押し隠して、僕は微笑んだ。

「お父さんの様子はちゃんと報告するからさ。家で心配せずに待っててよ。」

僕はそれだけ言って、巽に背を向けて走り出す。本当は病院の廊下を走ってはいけいけないけど、走って巽の視線がなくなつたところで、立ち止まった。

胸がずんと重い。この感情の正体はわかっている。罪悪感だ。

巽に、ここ最近の出来事で一番傷ついている巽に一番ひどいことをしている。

わかっているけど、これしか方法なかった。

僕が泣いていい問題じゃない。

僕は気を取り直して紙袋を持ったまま、一番近い手洗いに入っていた。

第三話 お父さん 1

「ふむ、今日は大分加減がよいようだね。」

年配のお医者さんが看護師さんを連れて、病室にいたのを見て、僕は思わず部屋の前で立ち止まった。

「ええ、おかげさまで。最近は随分気分がいいです。」

落ち着いた声が聞こえてきて、ほっとすると同時に泣きたい気分になった。

「あら。小野寺さん。今日はお嬢さん（・・・）がお見えのようですね。」

お医者さんの後ろにいた看護師さんがこちらに気付いたみたいに声をかけてくれる。

少し年配の看護師さんとふくよかなお医者さん越しに帽子を被った男性の姿が見えた。お父さんだ。

こちらの姿を認めたお父さんが笑いかけてくれる。

「勝美。来てくれていたのかい？」

「お父さん。」

僕はトイレで着替えてきた姿で病室に入っていく。

春先で少し肌寒い季節。水玉のキャミソールに薄いグリーンのパーカー。七部丈のジーンズにピンクのスニーカー。すべて清ちゃんに届けてもらったものだ。

着ていた学ランは紙袋の中につめてある。

今日の僕は小野寺勝美。十五歳。異の双子の妹、正真正銘の僕の本当の姿だ。

「おやおや、勝美ちゃん。今日は可愛い格好をしているね。」

年配のお医者様が褒めてくれるが、その横でお父さんが首を振った。「いえいえ、院長。勝美は今日も可愛いんです。いつも可愛いんですよ。」

臆面もなくそう言うお父さんの言葉に思わず、赤くなる。

「お、お父さん。人前でそんなこと。」

「ははは。いや、すまない。そうだったね。勝美ちゃんはいつても可愛い。」

いつものことなのか、お医者さんはお父さんの言葉に気を悪くした様子もなく笑ってくれる。

ある種それも問題な気もする。

「院長。そろそろ他の方の検診が。」

看護師さんがお医者さんにそう話しかけ、お医者さんも鷹揚に頷いた。

「ああ、そろそろか。それじゃあ。小野寺さん。娘さんが来てくれたからって無茶は禁物だぞ。」

「わかっていますよ。院長。安静第一。まだ子供達も小さい。まだ死ねませんよ。」

笑うお父さんの声に思わず胸が痛くなる。だめだ。平静を装わなくちゃ。

そんな僕の肩をぼんとお医者さんが叩いてくれる。その仕草に心が落ち着くのを感じる。

そうだ、僕がすっかりしなきゃ行けない。

お医者さんたちが出て行った病室で、僕は無理やり怒った顔を作った。

「もう！お父さんたら。いつも恥ずかしいからやめてっていつていでしょ？お医者さんも親バカ加減に呆れていたじゃない。」

「ははは。そんなこと気にしているのかい？いいんだよ。聞きなれているだろうし。」

「き、聞きなれているって…。」

一体何を病院で話しているのか気が気でない。

このベットで笑っているのが、僕達のお父さん。

病気のせいで少しこけた頬、薬に副作用で髪の毛の抜けた頭に帽子を被ったお父さん。小さい頃にお母さんを亡くして以来男手一つで僕達二人を育ててくれた。

お父さんが病気で倒れたのは半年前。

僕達にはまったく弱音なんか吐いたりしなかったけど、僕達の世話と働きすぎで身体を壊していながら無理して働いていたらしい。そのツケが今になって襲ってきたと言つのはあまりにも悲しい話だ。だが現実。

倒れて一年。病状は一進一退を繰り返し、今に至る。

「勝美。そう言えば、巽は？今日は一緒じゃなかったのか？」

「え？巽？」

清ちゃんに宅配を頼んだ紙袋の中身、一部お父さんの着替えを棚に直しているときに、話しかけられ、ぎくりとする。

「巽は…。なんだか今日部活に入部届けだすから少し遅くなるから来られないとか言っていたような…。」

「え！そんなのか？やっぱり野球部？」

お父さんの顔が明るくなる。その顔は近年見られなかったほど、期待に満ちて輝いているように見える。圧倒されて思わず身を引いた。「う、うん。」

「そうか。とうとう。巽も甲子園目指すんだな。」

うきうきした表情のお父さん。

お父さんは高校生のとき、野球部でしかも甲子園常連校の投手でエースだったらしい。

当時はすっごくマスコミにももてはやされていたとか、伝説になっているとか。

そのときにバッテリーを組んでいた人はプロになって、今は既に引退してプロ野球のコーチをやっているらしい。

お父さんは家の事情でプロにはなれなかったけど、そのことが一番のお父さんの自慢で僕らの自慢でもあった。

お父さんは機会があれば高校野球時代のことを話してくれた。僕らはその話をするお父さんが好きだった。

そのきらきらした思い出を話すとき、巽は必ず言ったものだった。

『僕もお父さんみたいに、『甲子園球児』をめざす！』

そう言う巽をお父さんは本当に嬉しそうに見るものだから、一度だけ僕もなると言ったことがある。

そのとき、お父さんは笑って『勝美は女の子だからなれないよ』と少し寂しそうに笑ったのを今でも覚えていいる。その顔が見たくなくて二度と言わなかったけど。

そんな僕らが中学三年生になって高校進学が決まって、巽がもうすぐ甲子園球児になる夢へと進む段階になったとき、あの事故が起こった。

第四話 お父さん2

「……勝美？」

「え？なに？」

お父さんの呼ぶ声で我に返る。思わず、自分の思いにとっぷり浸っていたらしい。

お父さんの前なのにもつたいない。

「いや、勝美のほうはどうかって聞いたんだ。高校生活。」

「僕のこと？」

思わぬことを聞かれて、思わずうろたえる。今日あったことを包み隠さず話してもいいものだろうか。だが、それとは別にお父さんには気になることがあったとおことがあったようで渋い顔をした。

「勝美。僕って言った。」

「え？あ。」

お父さんは僕が僕と言うことにあんまりいい気がしないらしい。言うたびに言われるから気をつけていたつもりだったんだけど。

「ごめん。つい。」

「いや、まあ、それはそれで可愛いんだけどね。やっぱり女の子の一人称が僕じゃ……。はあ、やっぱり男親だけだったのが、いけなかったのかな。ごめんな、勝美。女の子らしく育てる環境がなくて。」昔から兄と一緒に扱われていたせいもあって、僕はどちらかと言つと女らしい扱いをされることが少なく、ほとんど男のようにして育ってきた。

その名残が僕と言う一人称。僕は小学校に上がるまで自分が本当に男の子だつてことを疑っていなかった。

そのことをお父さんはひどく気にしているみたいだった。

「今だつて、そんな男の子みたいな髪型。切るなつていったのに。」ちよつと涙目で情けない顔をしたお父さんに、こちらも困つた顔をする。

僕も中学生のときは清美と同じくらい、いや、もっと長い髪をしていた。

だけど、巽の代わりに今の学校にいるためには長い髪が邪魔だったからばつさり切ったのだ。だが、それはお父さんには内緒だ。

「もう、それは散々聞いたよ。ちよつとイメージチェンジしたかったんだよ。高校生になるわけだしね。」

そう笑うと、お父さんがまじまじとこちらの顔を見つめてきた。

「…？なに？」

「…いや、無事にお前達も高校生になったんだなって。あの時、あの事故の知らせを受けたときの絶望感ときたらなかったから。なんだか感慨深くて。」

思わず涙目で鼻をすする、お父さんの表情に胸を打たれる。

あの事故。僕は両手を強く握り締めた。

あれは中学の卒業式が間近に迫った日、僕達は事故にあった。

僕らは下校途中にトラックにはねられた。幸いというか奇跡的といつか、僕はかすり傷程度で済んだ。だが巽は。

巽の顔にある眼帯を思い出す。巽も外的にはひどい傷を追う事はなかった。

だが、事故のときに打った頭の後遺症で、片方の目がほとんど視力を失った。

他には特にひどい傷はなかった。ほとんど。あんな事故に見舞われたのに本当に無事だった。だけど、視力の低下はスポーツ選手としては致命的だった。

巽は中学時代、全国大会に出るほどの優秀な投手だった。皆が注目した。プロのスカウトマンらしき人が見に来たといっていたこともあった。

だが、事故にあって以来、巽はグローブやバットに触ったところを見たことがなかった。

僕にはちつとも弱音を吐かないで、むしろこつちを励まして。今日みたいに笑って。

どれだけ悲しかっただろう、どれだけ絶望感にさいなまれたことだろう。

ずっと巽にとつて甲子園を目指すことは夢だった。

お父さんにとつても巽の甲子園での活躍は夢だった。

先日、お医者様から話があった。

『勝美ちゃん。事故の後で残酷だとは思ったけど、こういったことは早めに伝えておいたほうがいいと思って。残念だけど…お父さんは。』

もってあと一年。

お医者さんはそう言った。言われた瞬間、僕はある決意を固めた。

僕は少し涙ぐんだお父さんに気持ちを悟られないように肩を強く叩いた。

「勝美痛いよ。いたた。」

肩をさするお父さんに笑ってみせる。

「もう！お父さんがおかしなことを言うからでしょう？高校入学ぐらいで泣くななんて。これからお父さんは病気治してずっと僕達の成長をみるんでしょ？巽が甲子園目指して、甲子園で優勝するところ見るんでしょ？」

「はは。甲子園で優勝かい？いくら巽でもそう簡単にはいかないさ。一年なんだから、まだベンチ入りも出来ない。」

「ううん。巽言ってたよ。一年から出場して、絶対に甲子園のマウンドに立ってやるんだって。」

「ええ？それは流石に無理じゃないの？」

くすくすと笑うお父さん。信じてない雰囲気には僕は頬を膨らましてみせる。

「自分の息子信じられないの？」

「そんなんじゃないけどさ。そんなに甘くないのも知っているからだよ。」

「大丈夫よ。巽なら。」

「そうかな。」

お父さんが笑う。その笑顔は頬がこけて、昔の頼りがいのある時代のもの比べれば力ないものだったけど、お父さんの笑顔だ。

「そうよ。」

私は願いも込めて、力強く頷いた。

「だったら、もう一つみたい未来がある。」

何？と聞くと、満面の笑みを浮かべた。

「勝美の結婚式。」

「っ！」

何も言えなかった。

僕、一回お前なんか勝美はやらんって相手の男に言ってみたいんだよね。とお父さんはうきうきと笑う。笑う。笑う。

あと一年。一年後、この笑顔がないなんて。

僕は泣きそうだった。だけど。

「そうだね。そこまで長生きしてよ。お父さん。」

僕はそう言っつて精一杯微笑んだ。だけど、今にも泣いてしまいそうで、僕は慌てて話題転換を図った。

「あ、そう言えば！」

僕はあることを思い出して、手を打った。

きよとんとするお父さんを尻目に清ちゃんから受け取った紙袋をあさる。

そこには清ちゃん発案、借り物兵器が一番下から出てきた。それを病室の小さな机にドンと置く。

「…勝美。これ、どうしたんだい？」

恐る恐るだが、興味深々で聞いてくるお父さん。そう言えば新しい物好きのお父さんの性分を思い出す。

「これはね…。」

僕は今日お父さんの前で、無理やりではなく、うきうきした顔で笑って見せた。

第五話 痴漢？

「おーい、小野寺！」

昼休み。お昼を清ちゃんと約束していたのでいそいそとその場所へ向かう途中、

学校の廊下を歩いているときにどこか鉛のある声に呼び止められて、僕は振り向いた。

「…？」

おそらく僕の名を呼んだであろう男子生徒の姿が目に入る。

だが、知らない顔に頭にはてなが浮かぶ。誰だろうこの人。

息を切らせて、僕の前で止まる。やっぱり僕に用があるらしいが、僕には彼が誰なのかわからず、思わず彼の顔をまじまじと見つめる。短い黒髪に三白眼気味の釣り目の男子生徒だ。

女子にしては背の高い僕より若干背は低い。まあ、僕が規格外だから十五歳の男子生徒としては割りと平均的な体つきの男子だ。だが、やっぱり見覚えのない顔だな。

「…なんや？もしかして俺が誰だかわからん？」

あんまり見すぎてせいか、どうやら視線の意味を悟られてしまったらしい。だが間違いではないから、頷く。

「うわっ！そりゃないわ！同じクラスやのに！」

大げさに顔を顰める男子に驚く。同じクラスだったのか。

「え！？ご、ごめん！」

昔から人の顔と名前を覚えるのは苦手だった。昨日の延高くらいインパクトのある人間ならともかく、クラスの人間全員の顔と名前を覚えるにはあまりに日が短い。

だが、顔を顰めた割には、その男子はすぐに気を取り直した。

「まあ、仕方ないなあ。俺、延高や小野寺みたいにインパクトあらへんし。すぐには覚えられへんか。」

「え？僕？」

延高ならわかるが、僕がインパクト？

まあ、確かに背は高いけど、さほどインパクトのある顔だとは思わないけど。

「そんなことは横に置いて。…それよりさ。ちょっと相談があるんやけど。」

どこか悪巧みしてそんな顔で早速用件を切り出そうとした男子を僕は手で制した。

「ちよい、待つて。その前に君の名前教えてよ。誰だかわかんない人間と話していると思うと気持ち悪い。」

「え〜。クラスで自己紹介したやん。結構周りに受けてたと思うとつたけど、俺もまだまだ修行が足りへんと言うことか。ま、ええ。

再び自己紹介したろうやないか。」

訛りの強い台詞回しで、なぜかその男子は踏ん反り返り、かっこつけているつもりかびしつと親指を突き出して高らかに名乗った。

「俺の名前は茜井あかねい 省吾。関西生まれのごつつ男前や！覚えとき！」

「……はあ。」

僕は溜息とも呆気ともつかない息を漏らした。一体なんなんだろう？昨日の延高といい、この茜井あかねいつて男子といい。この学校の男子ってどうしてこう変な人が多いんだろ。本当に進学校なのか少し怪しみ始める。

脱力しながら疑心暗鬼にかられる僕に茜井が人指し指をちちちつと振る。

「せやないやろ？そこは『男前なんて自分でユ〜な！』とか言つて突っ込むところやん。ほら、も一回いくで。」

「え〜。」

わけのわからない突っ込みと指導に声をあげる。本気でわけがわからない。

「えー、やないわ！漫才におけるボケと突っ込みはオーラルコミュニケーションの基本やろ！」

「いや、本気でわけがわからないし。てか、いつ漫才したのさ!？」

思わず突っ込むと、茜井がぐつと親指を立てた。

「おお！その調子や！そう言う風に間髪いれずに突っ込むんやで。」
「いやいやいや。グツジョブとか言われても！わけわからんですよー
ー！

僕は混乱する頭を落ち着けるために一度深呼吸をして心を落ち着けた。

「すーはー。…よし。」

そんな僕の様子に茜井が不思議そうな顔をしている。

「なんや、血圧上がったか？またカロリー高いもんばっかり食べとんのやる？あかんで、その年でメタボか？」

その言葉に又突っ込みたくなるのを感じたが、グツと堪える。

「…それより茜井…くん？僕に何か用なわけ？」

一瞬自分が呼び捨てにされていたので茜井もそうしようかと思っただが、相手の了解もなしに呼び捨てるのは気が引けたので、君付けで呼ぶ。

「ああ、茜井でいいで。呼び捨てたって。そや。俺は小野寺、お前をスカウトしてきたんや。」

茜井が含み笑いのあくどい顔をこちらに向けて、にんまりとした。

「相手にはならならぬから。他あたって。」

間髪いれずに速攻お断りする。

すると、茜井が盛大に後ろに向かってこけた。

「おお！これが伝説に名高い、関西人がよくするというよし とのこけるというやつだろうか。」

だが、一応場所を考えたほうがいいと思う。人が大勢歩く廊下では埃も多いし、お昼休みの前半で廊下には人通りが少ないが言いわけじゃない。誰かに踏まれても文句は言えないと思うぞ。

「勝美！」

「ごすっ！」

「ぐきやつー！」

お約束というか案の定というか。

突然現れた人物に床に転がっていた茜井は狙いあまたず顔面を踏まれ、つぶれたヒキガエルのような声が聞こえたが、僕は無視した。茜井を踏んづけ、いや、そこに現れたのは黒髪の美少女、清ちゃんだった。

「清ちゃん、あ。いや、き、清美。」

思わず清ちゃんといいそうになつて、慌てて呼びかえる。今の僕は男の子。女子である清ちゃんをあだ名で呼ぶのはちよつとおかしいかなと思つたし、異も清ちゃんなんて呼ばない。異に習つて名前を呼び捨てる。言い慣れない名前に気恥ずかしい。

だが、僕の様子なんて気にしないで清ちゃんが腰に手を当ててお姉さんみたいに怒つた。

「もう！勝美つたら、何を油を売っているのかと思えば、こんなところで。早くお昼食べないと休み時間終わつてしまいますわよ？」
「どうやら、なかなか待ち合わせに来ない僕を心配して見に来てくれたらしい。」

「ご、ごめん。ちよつと捕まつてて。」

「捕まる？…一体誰にですか？」

「清美の踏んづけてる人。」

「踏んづけ…？きやあ！」

気付いていなかったのか、清ちゃんが驚いたように茜井の上から飛び降りて、こちらに抱きつく。

「…なんか柔らかいリノリウムかと思つていましたけど。」

いや、それはいくらなんでもないでしょ？とは思つたけど、あえて突っ込まない。ええ、突込みではないから突っ込みませんとも。

「……………ろ…。」

「？…どうした。茜井？」

なにか呻いている茜井に耳を澄ます。

「…し…ろ、レース…。」

少し顔を赤くしながら呻く言葉を聞いたとたん、清ちゃんが顔を赤くしてスカートを抑えたのを見て、その意味を悟る。

「ごすつ。」

「ぐぎゃあー!」

とりあえず、足を顔面に突き刺しておく。人の下着を覗く痴漢行為は不可抗力でも許しません。

今度こそ白目を向いて倒れ付す茜井。

「…とりあえず、鉄拳(?)制裁。オケ?清美。」

「…許します。」

顔を真っ赤にしているが、女王様みたいな威厳を持ってお許ししてください。

可愛い。清ちゃんは可愛いなあ。

「じゃ、用もないし、お昼行こうか。」

「…この人放置しておいてもいいんですの?」

「痴漢に情けはかけない。」

すっぱり切り捨て、僕は複雑そうな顔の清ちゃんを引っ張ってその場を後にした。

第五話 痴漢？（後書き）

お笑いキャラ登場？

第六話 屋上にて

鉄製の扉を開けると風が吹いてきて、僕の短い髪をくすぐった。

まだ四月の風は若干冷たかったが、春らしい陽気のおかげで気持ちよく脇を通り過ぎていく。

空が見える。そこは学校の屋上だった。

「わあ！空が近い！」

思わず歓声を上げると、後ろで扉を閉めていた清ちゃんの苦笑の聲が聞こえた。

「くす。勝美、子供みたいですね。」

ちやりんと、その手の中で鍵が音を立てた。

普通は屋上は立ち入り禁止。だけど、特別にと、清ちゃんが借りてきた鍵で僕達はそこをお昼の場所にすることに決めたのだ。

普段立ち入り禁止だから、人も来ないしね。

穏やかな風が清ちゃんの髪を撫でていく。

笑う清ちゃんは綺麗で可愛い。可愛いんだけどね。

「きよちゃん。」

僕は少し睨みを利かせた視線で清ちゃんを見た。清ちゃんの顔が驚く。

「なんですの？」

「な・ま・え。間違えないですよ。僕は今、巽だよ。」

僕は清ちゃんに見せ付けるみたいに、腕をいっぱい広げて学ランを見せるように胸を張る。ちょっと、だぼつく黒い服。今の僕は小野寺巽。性別男だ。

お父さんの、巽の夢をかなえる為に、巽と偽ってこの学校に来た。

女である小野寺勝美ではどうやったって甲子園を目指すせない。だから、僕は巽の名前で学校に来ている。

目的はただ一つ。甲子園への出場だ。

僕だって、それがそう甘いもんじゃないことはわかっている。それ

でも、お父さんに自分の子供が甲子園に向かって努力した姿を見て欲しくて、そして願わくば、甲子園へ出場した姿を見てもらいたい。本当は巽が推薦入学をもらっていた野球の超名門校、鳴が原高校しきがはらにいければ、甲子園出場の可能性もかなり高まるのだが、選手層の厚い鳴が原では一年生がベンチ入りするのも難しい。

余命があまりないお父さんが巽の高校野球姿を見れる前に死んでしまふ可能性があるため、僕はこの柏原高校に来た。

野球が強いと一言も聞かない学校だが、清ちゃんのおじいさんが会長を務める越前グループの傘下にあるため、清ちゃんが一声かければかなり内部に融通が利く。女である僕が事故のことを隠して兄、巽に成り代わるという正直無茶すぎる方法を取れたのもこの学校であつたからだ。

この学校で僕の正体を知っているのは、僕を推薦入学させてくれた理事を務める清ちゃんの叔父さんと清ちゃんだけ。叔父さんは経済面を支援しているが、学校本体に関わる仕事をしているわけじゃないので、ほとんどこの学校にはいない。そのため実質清ちゃん一人だ。それ以外はまったく僕、勝美を知らない。

この学校では僕は巽としてクラスメイトにも接している。それなのに共犯者たる清ちゃんが僕のことを巽と呼ばないのはおかしく思われる。決してばれてはいけないことだ。

「あ……。ごめんなさい。つい。」

清ちゃんが気まずそうに目を伏せた。まあ、清ちゃんにとっては彼氏の名前。妹とはいえ彼氏の名前で僕を呼ぶのは躊躇いがあるのだろう。

巽は今、清ちゃんの家にいる。お手伝いさんもいる大きなお屋敷。片目の視力が急に低下したせいで、体調が優れないことが多いから家に一人では置いて置けなかった。僕も看病したかったけど、学校に行つて部活をしてお父さんの世話をすることで、きっと一杯になる。入院させることも考えたけど、今の巽の姿を同じ病院にいるお父さんに見せたら、すべての計画が水の泡だ。だから、たまに検診

に行く以外には病院に近づかない。辰巳はお父さんにも会えない。それに僕が巽に成り代わっているから、巽は学校にも行けない。一人を外にも出られない。

幸いなのか何なのか、外面のいい兄は清ちゃんの両親にも気に入られているようだ。

半年。今年の夏が終わるまで。多分お父さんに高校野球している姿を見せられる刻限だ。

夏が終われば甲子園への夢もつぶれる。来年はない。それまで巽にも無理を強いる。

清ちゃんにとつては誰よりも好きな人だ。そんな巽にひどいことをしている僕はひどい奴だと自覚している。そしてそんなひどい人間を巽の名前で呼べといっている僕は本当に自分を自分で引っ叩きたかった。

だが、それでも、言わなければいけない。

僕はそつと彼女の手をとった。

「無理を強いているし、清ちゃんにはすつごく我俣を言っている。

でも、ごめん。我慢して。」

僕は清ちゃんの手を握りこんだ。

本当は友達の清ちゃんにこんなこと頼める義理もない。

無茶を言っつて我俣聞いてもらっつてすつごく迷惑をかけているのもわかっている。

清ちゃんのお金持ちを利用して、最低な行為だ。

でも、僕はまだ子供だ。一人で巽もお父さんも守れない。願いなんて叶えられない。

今は清ちゃんにしか頼れない。

「ごめんね。ごめんね。」

ただ謝るしか出来ない。この先この恩を返せるかどうかもわからない。

そうしたら、握っていた清ちゃんの手がかすかに握り返してくれた。「いいんですよ。勝…いえ、巽。私の使える力が少しでも貴方達

の役に立つならこれほど嬉しいことはありませんわ。」

「……………」

「私の周りには私の持つ財力を利用しようとする輩しか、近づいてきたりしませんでしたわ。私が築いたものを、私自身をなど何一つ見ようともしないで。私の後ろばかりを見て、それを利用しようとする人間しかいなかった。」

「でも貴方達は最初から違った。私を対等の友人として扱ってくれた。それだけで貴方達の窮地を助けるには十分な理由になる。」

「…清ちゃん。」

僕は思わず泣きたくなくなった。だが、ぐつと堪える。泣くような場面ではないから。

清ちゃんが背伸びしてこつんとこちらの額に額をつけてきた。伝わる体温がくすぐつたい。

「巽は私のことをそのように呼びませんわよ？」

「っ！…清美。ごめ…。」

「巽はきつと謝りもしませんわよ。あの人、基本的に謝らないですよ？変なところで意固地だから。きつとこつというのですわ。」

ありがとう。

友達だから、力を貸す。対等である証拠に、謝罪よりも感謝の言葉を。

「…ありがとう。清美。」

「…よく出来ました。」

清ちゃんはお姉さんみたいに、自分より高い位置にある僕の額にかかった髪をくしゃりと撫でた。

第六話 屋上にて（後書き）

屋上の

春風に吹かれて

ゆり気分

…うそです。ごめんなさい。

第七話 ストーカー？

「さ、それより。お昼にしましよ。いい加減本当に食いばぐれてしまいますわ。」

にっこりと笑った清ちゃん。相変わらず可愛いなと僕はぽおと見られた。

二人きりの屋上。ここでは僕は異ではなく勝美としていられる。

いつも張り詰めていた学校内で唯一気の抜ける場所。

だからだったのだろうか。僕は清ちゃんと僕をこっそり見ていた視線に気付かなかったんだ。

「お前、女王様と知り合いだったんやな。」

放課後、授業が今しがた終わり、皆が下校の準備をする中で、後ろから声を掛けてきた茜井に僕はにっこり笑った。

「痴漢と話すことはないよ。」

「……………」

僕の笑顔に引きつった顔をする茜井。失礼な。

「……………」お前な。言うとるないか。あれは不可抗力。事故や事故！あんなん駅の階段でスカート短い女子高生の裾からパンツが思わず見えてしまうようなもんやろが。俺は悪うな……ぐおっ！」

帰り支度に掴んだ辞書を茜井のわき腹に叩き込む。座ったままだから力が入らず、茜井は軽くよろめくだけだ。ちっ。

「一度死んどくか？」

「殴ってからゆーな！殺す気が、あほ！」

げげげほとむせながら、わき腹を押さえる茜井から視線を外し、帰り支度を続けながら、ふと気になったことを聞いた。

「……つか、女王様ってなに？誰？」

「越前清美のこと。越前グループ総帥の孫にしてこの学園の女王様。」

「清美が、女王様。」

女王様と聞いて、思わず、アリスに出てくる意地悪な女王様を思い出す。どぎつい色のドレスのハートの女王。断じてあんなの清ちゃんとは似ても似つかない。

「どこが。どっちかと言うと女王様じゃない？プリンセス。」

王女様の言葉で連想するのはふわふわピンクのレースたつぷりのドレス。

うん、そのほうが清ちゃんには似合う気がする。可愛いなあ。

想像して僕は思わず顔を綻ばせた。

「……げー。女王様が王女？どついう視神経しとるんや、それは。」
だが、物を見る目のない茜井はまずいものでも食ったみたいなお顔を

「それはこつちの台詞だよ。あんなに可愛い女の子捕まえて女王様つて。」

「お前がいつあの女王様と会ったかは知らんが、女王様のことは中等部の頃から有名やで。この学校は表向きこそ合議制の理事会によって運営されとるが、越前グループの完全なる傘下や。そこのお嬢さんたる女王様はこの学校では本当に女王様みたいな権力にぎつとるようなもんや。」

その言葉に、僕は屋上で清ちゃんが言っていた言葉を思い出す。

『私の周りには私の持つ財力を利用しようとする輩しか、近づいてきたりしませんでしたわ。』

なるほど。僕達は中学校は別の学校に通っていた。

僕達は地元の公立中学校。清ちゃんはこの柏原高校の付属中学だ。僕達と同じ学校に入るのには実は高校になってからが初めてだった。

僕達と清ちゃんはお父さんの同級生のお嬢さんとして出会った。

清ちゃんはお嬢さん。僕達はいたって平凡な家庭育ち。本来接点のない間柄だが、

父親同士が高校時代の友達だったせいで、出会って、今の関係がある。

清ちゃんのお父さんも大会社の社長さんらしいが、僕達からすれば、ただの気のいい叔父さんだ。

だから正直清ちゃんが、お金持ちのお嬢さんだという、しかも日本屈指の大金持ちの孫だという肩書きのある女の子であることは今まで実感がなかった。

だが、ところ変わればと言う奴か。茜井みたいに何も考えてなさそうな奴でも、清ちゃんのことを女王様と呼ぶ事実に、清ちゃんの悲しい顔が不意に思い出されて腹が立ったから、思わず、茜井を睨んだ。

「だからなんなんだよ。親戚は親戚だろ。清美自身とは関係ないだろ？」

「なんや！いきなり怖い顔して。別に女王様がどうのと言っとるわけやないやろ。ただ、お前ら知り合いやったんやなとっただけやんか。…やっぱりの噂は本当、やったんやろか。」

「…噂？」

キョトンとすると、茜井がこちらをちら見したかと思うと、

「小野寺と女王様が付き合おてるって噂や。」

「はあ？」

思わぬ噂に頓狂な声を上げてしまう。僕は女で、清ちゃんも女。そんなわけはない。

いや、でも今の僕は巽で、男で。その巽の彼女である清ちゃんも僕の彼女に表向きはなるわけなのか？それに入学式からこっちよく一緒にいるから、そう言う噂がたっただっておかしくはないわけで…。

思わず考え込んでしまった僕に、茜井がなぜか確信を持ったように頷いた。

「そっかー。果ては逆玉かー。」

「あほ。」

僕は教科書をつめ終えた学生靴をあほの頭に叩き込む。重量級の教

科書や辞書を備えた学生鞆は真心を捉え、直撃して、茜井がうずくまる。

「つつつつつ！」

痛みに言葉もない茜井。流石に突っ込みとしては入れすぎたかと思つてすずめの涙ほどの同情心を口に乘せる。

「よければいいのに。」

「それが、殴つた相手に対することばくわあ！なんか俺に恨みでもあるんか！」

怒鳴る茜井に、僕はにっこりと笑つた。

「いや、別に。僕もそんな狭量な男であるつもりはないんだよ。うん。昼間のことも未だに怒っているわけじゃないし。」

「思いつきり恨んどるやん！それ！」

茜井の突っ込みに、僕は頭の後ろを掻いた。うつつうつしいな。

「それよりさ、茜井。お前、僕になんの用なわけ？」

昼間に蹴り倒したのになぜか茜井は清ちゃんとの昼休みのあと、時間があれば僕に話しかけようとする。それをことごとく無視していたのだが、いい加減うつつうつしい。僕は暇ではないのだ。

「いい加減本気でうつつうつしんだけど。」

「…お前。本気で口悪いな。」

「大きなお世話だよ。」

「まあ、ええわ。そう、俺はお前に聞きたいことが…。」

「僕に答える義務はないよね。」

僕は茜井の台詞を最後まで言わせず、鞆を持ち上げ、立ち上がった。そのまま、教室を出て行くこととする僕に茜井がしつこく追いかけてくる。

「ちよっ！待ちや！なあなあ！お前さ。部活。もう決めた？」

背が違うので、歩を緩めず歩く僕に、茜井は小走りについてくる。

…本気で、うつつうつしい。

「…なんでそんなこと茜井に言わなきゃいけないわけ？」

「もし決めてないんやったら俺と同じ部活入らへん？サッカー部！」

話を聞こうよ、まったく。いい加減にしてくれ。

僕は立ち止まって茜井を振り返って怒鳴った。

「何で僕がお前と同じ部活に入らなきゃいけないわけ？それもサッカー部？」

僕の剣幕に茜井が驚いたような顔をした。

だが、予想外な男だ。茜井。驚いたポイントが僕の思ったものではなかった。

「…お前、その恵まれたガタイで文化部にでも入るつもりか？もっ
たいたい！」

こけてもいいたろうか。いやそれだけは僕のプライドが許さない。

「そう言う問題じゃないだろ！」

「せやかて、そう言う問題やる？柏原といたら運動部、サッカー部くらいしか強くないし。」

「強くなくても他にも運動部があるだろ！」

「えー。他の部活は入ったかて、あんま活躍は出来へんと思うで。まあ、個人技の陸上とはやったらお前ならそこそこ活躍できそうやけど、地味すぎるやる。」

陸上が地味とは偏見もいところだ。地味で悪かったな。僕は中学時代に陸上をやっていたんだ。だが、茜井は僕のことなどお構いなしに話し続ける。

「せやかてチーム競技やったら卓球もバスケもバレーも弱小すぎるで。柏原ははつきり文科系のクラブが強いからな。運動部はどこも弱い。」

僕はいらいらする。そこまで球技系のいろいろ出てきているのに、なぜ肝心のものが出てこないのだろう。

「僕は野球部に入るんだよ！だから、サッカー部に入らない。わか
った？」

きっぱり言うと、なぜか茜井が変な顔をした。驚いたかと思うと、頭おかしい人を見たみたいな哀れみを帯びた視線。…なんだよ、非常に失礼だな。

「…なんだよ。」

「いや、小野寺。大丈夫かと思つて。」

心底心配そうな顔をされて、さらに傷つく。…茜井の癖に生意気な。

「だから何が…。」

「知らんのか？ 柏葉に」

一拍置いて茜井が爆弾発言をした。

「野球部はないで？」

第七話 ストーカー？（後書き）

なんか冒頭中途半端ですんません。

前回書ききれなかった部分の追加。

暫くしたら前の話に追加してずらします。
読みにくくてすんません。

第八話 野球同好会 1

ぱしっ、ぱし。

春めいた陽気の中で舞う桜の木の下。

赤い縫い目の白いボールが、散り行く桜の合間を縫って三角に飛ぶ音がする。

ここは柏原高校の裏庭だ。

昨日、延高の修羅場に行き当たっていけなかった場所では、三角形になり、キャッチボールに勤しむジャージ姿の男子生徒の姿があった。

「ごめんねえ。せつかく見学に来てもらったけど、今日のメニューはほとんど自主練習に近い内容で。見ているのはつまらないかもだけど。」

僕と一緒にその光景を見ていたマネージャーである山田奈々子先輩は少し困ったような顔で僕達に微笑んでくれた。

小柄な身長のちよつとおつとりとした印象の二年生だ。肩より少し長いくらいの髪がかすかに揺れた。

「いいえ。そんな！先輩が謝ることじゃないですから。」

きりりとした顔で、標準語をしゃべる茜井がなぜか僕の隣にいた。

何でついてきたのかは不明だが、とりあえず僕は目の前の光景に驚いて二の句を告げない状態だった。

目の前でキャッチボールで汗を流している先輩方は三人。この場所に着いたときには練習が始まっていたので途中で話しかけることも出来ずに、そば佇んでいた山田先輩に声を掛けたのだ。

「あの、山田先輩？」

僕は目の前の光景に釘付けになりながら、横の小柄な先輩に話しかける。その顔が引きつっていないかが心配だ。

「ん？なにかな？」

「これで部員全員ってなんですか？」

「え？まさかあ。」

きやらりと先輩が笑う。

「そうですね。もちろんですよ。」

野球は一チーム九人で戦うスポーツである。ナイン。つまり明らかに人数が足りない。これではゲーム自体が出来ない。

「同好会って五人以上会員ないと設立できないもの。他に名前だけ貸してもらっているだけの幽霊部員が二人いるわ。一度も練習に来たことないわね。それから旅に出ているのが一人。一応それで、書類上六人よ。」

幽霊部員はともかく旅ってなんですか？一体。

にっこりとそんな発言をされ、僕は固まった。

「ま、実際に活動しているのはそこにいる三人だけ。今の野球同好会のメンバーは実質私を含めて四人と言っても差し支えないかもしれないけど。」

山田先輩が可愛い顔をして、僕に痛恨の一撃を連打してくる。本人気付いてなし。

「ほら、小野寺いうたやろ？柏原に野球部はないて。」

こっそり横から茜井が無駄に胸を張りながら、山田先輩に聞こえない小さな声で耳打ちしてくる。にやりと笑う顔をどつきたい。

そう。柏原に野球部はない。ここにあるのは野球同好会。部以前の団体だ。

僕は空を仰ぎ見た。野球部の噂は聞かなかった柏原。そりゃそうだ。存在自体がないのであれば、噂なんて流れようもない。

清ちゃんから野球を柏原の野球部について、『野球をやっている団体は裏庭でしている』という情報だけもらっていた。それが同好会だとは知らなかった。

いや考えてみれば、正式な部であれば裏庭何ぞで、やるわけではない。僕は練習風景から、かすかに視線をずらして裏庭を見た。

体育館の裏に位置するそこは十分なスペースがあるとはいえなかった。

地面には雑草が生えているからグラウンド整備がされている様子もない。

今やっているようなキャッチボールくらいならできるかもしれないが、バッティング練習などは絶対に無理だ。

バッティング練習が出来なければ、守備練習も出来るわけがない。そんな不完全な練習場所が、曲がりなりに学校公認の部活動にあてがわれるはずがない。

同好会だと言うことにも頷ける。

さらに、目の前で繰り広げられるキャッチボールを見て頭痛すらしそうだ。

ヒョロイ。いつたいこの球速のキャッチボールで本当に練習になっているのか、わからないくらいだ。

「よーしっ！この辺でキャッチボールはこの辺でいいだろう！」

意識を飛ばしそうな悲惨な練習風景を見ていと途中で、キャッチボールをしていたうちの一人の男子生徒が自分の取ったボールを次に投げずに、練習を止める。

僕より少しだけ背の高い、山田先輩が、主将の海棠先輩だと言うことを教えてくれる。

「それじゃあ、次は…。」

こちらに気付かず、練習メニューを続けようとした海棠先輩に山田先輩が声を掛けた。

「海棠君。ちよつといい？」

「？なに、奈々子…。つて、あれ見ない顔だけど新入生？もしかして入会希望！？」

山田先輩の横にいる僕らに気付いて、ぱっと明るい顔を向けてこちらに走ってくる。

それに習ってか、他の会員の先輩達も集まってくる。

「焦らないで。まだよ。一応見学希望だけど、入るかはまだ未定。」

一応僕は茜井に件の爆弾発言を聞いた後、真偽を確かめるためと、どうせ入部するために行くつもりだったから、ダッシュでこの場所

に来た。ついでになぜかそれについてきた茜井が勝手に二人分の見学を山田先輩に申し出たのだ。

「そっか。でもよくこの場所がわかったね。同好会はクラブ紹介も出来ないのに。」

そう言えば、二日前に行われた体育館でのクラブ紹介が行われたことを思い出す。既に僕は入る部を決めていたつもりだったので、会場内では他に気付かれないように爆睡していた。そうか、同好会は発表なかったんだな。

「友達に、ここで野球の練習をしていることを聞いていたので。」

「へえ、目ざとい人だね。ここ、あんまり人が通らないから、今年の一年生は誰も野球同好会のこと知らないかと思っていたよ。」

あっけらかんと笑う海棠先輩に呆然とする。それでいいのか？人数が少ない割には危機感がない。勧誘しなくて大丈夫なのだろうか？

「そう言えば、君達、名前まだ聞いてなかったね。聞いていい？」

山田先輩がおつとりと笑うと、瞬間茜井が嬉しそうに声を上げた。

「茜井省吾って言います！よろしゅう！山田先輩！」

その勢いに驚く山田先輩。周囲の先輩方は苦笑いした。

「おーい。茜井、だっけ？山田は既にこの保のお手つきだよ。今更アタックしてもむだだからやめとけ。」

海棠先輩の左となりから顔を出した坊主の先輩が海棠先輩を指差し、笑いながら茜井に忠告する。

それにながーんと自分で言いながらシヨックを受ける茜井。

だんだんこいつの特性が判ってきた気がする。…まったくもって嬉しくないが。

「お手つきって。長井、お前幾つだよ。」

少し顔を赤らめて海棠先輩が長井と呼ばれた坊主の先輩の顔を睨むみると、山田先輩も少し顔を赤らめていた。そうか、この二人付き合っているのか。

ある種どうでもよい情報だな。

勝手にじゃれ合う先輩方に完全に置いてけぼりを食らっていると、

もう一人の先輩が長井先輩に同調する。

「まあまあ、最初に言っておいたほうが、後でわかるより痛手が少ないだろうが、それよりそっちの背の高いほうはなんていうんだ？」
「なんというか。非常に印象深い先輩だった。髪は、染めるのは禁止だから、地毛なのだろう。明るい栗色の猫毛に優しげな同色の瞳。背は僕より、茜井よりさらに低い。」

女子と混ぜてもわからないくらいの女顔なのに、腰が砕けそうなハスキーボイス。

「ばっさばっさの睫はお人形さんみたい。なんなんだろう？この無駄張りの色気は。」

男の人だよな。ジャージの色、紺色だし。男女でジャージの色が違うから間違いようはないはずだ。

度肝を抜かれて思わず、呆然と見つめると、長井先輩がその先輩の肩に手を置いてにやりとした。

「おお。佐助。早速、一年生に信者を増やしているのか？にくいな、この。」

「うるさいよ。長井。で？なんて名前なんだ。」

「えっと。その。」

あんまり度肝を抜かれすぎて、思わずしどろもどろになる。清ちゃんで綺麗な外観の子には耐性あると思っていたのだが、この圧倒的な美貌を前に気おされずには要られなかった。

するとはつきりしない僕の様子に佐助と呼ばれた先輩の眉根がぴんと上がった。

「はつきりしないね？自分の名前もいえないのか？男の癖に。」

最強の美貌の人の怒り顔は迫力がある。僕は思わず怯えてしまった。ひいひい！

隣で、茜井も流石に硬直しているみたいで、二人の後輩の気配を悟った海棠先輩が助け舟を出してくれた。

「まあ、篠崎。お前に睨まれたら言えるものも言えなくなるって。」

「そうだな、先に僕らの名前を名乗っておいたほうが、言いやすいか」

な。」

そう言つと海棠先輩が、それぞれの名前を紹介してくれる。

「俺は海棠保。かいどうたもつ。この主将をしているよ。そっちの坊主が長井大輔。ながいだいすけ副将だな。そっちの綺麗系が篠崎佐助。しのまきすけ皆二年生だ。」

「入つても入らなくても、よろっしく!」

乗りよく長井先輩がウインクを投げてよこす。ある種それも怖い。

だが、怖がつてばかりいられないから、僕も漸く自己紹介すべく口を開いた。

第八話 野球同好会1（後書き）

漸く、野球部出てきましたあ。あ、同好会か。
野球がテーマのはずなのに遅い…。
なかなか濃い面々。

第九話 野球同好会2

「あ、小野寺巽、一年生です。」

「…え？、小野寺…?!あの中学インターハイで全国優勝した駒中の小野寺巽か!？」

長井先輩が驚いた顔をした。

そう、あの笑い上戸のあほ子の兄は実は中学時代結構な有名人だったりする。中学時代三年連続スターティングメンバーで全国大会を総なめにした名投手。豪速投手、神の腕とも言わしめた。事故さえなければおそらくプロにもなれたかもしれない。

高校野球と違って中学の野球なんてあんまり有名じゃないから、一般的にはそんなに知られてないけど、それでも野球かじっている人間なら巽を知っている人間がいてもおかしくはない。

もちろんその辺も心得ているから、僕は慌てなかった。

「いえ、違います。」

きっぱりと否定する。

僕のポジション的には投手だけど、巽みたいに豪速球を投げるタイプじゃない。小学生時代にはチームに入っていた経験はあるものの、中学時代は陸上をやっていたしブルックがある。そんな僕がインターハイのスター選手と同じ動きが出来るわけないし、もしそうだと行って違いを指摘されても困る。

「同じ名前でそんなすごい人がいるんですね。知りませんでした。」

僕、中学では陸上をやっていましたし、別人ですよ。」

穏やかに応じると、少し疑わしそうな長井先輩の視線にぶつかる。知らないは嘘だけど、それ以外は嘘ではない。ええ、まったく嘘ではないですよ。

「ま、赤の他人だって似てる奴は、三人はいるって言うし、同姓同名はそんなに珍しいことじゃないよな。それに、そんな有名な奴がうちみたいな学校に来るとも思えないし。」

海棠先輩が穏やかに応じてくれる。穏やかな人だな。逆に言えばちよつと頼りない気がするけど。

「で、どうかな？この部？今日の練習見てもあんまり楽しさ伝わらなかつたと思うけど。」

「え？そんなことないですよ。」

その感想は本当だ。確かにキャッチボールだけしか見てないけど、その間、先輩達の楽しそうに笑っていた。本当に野球が好きでやっている。そんな感じだ。

「それに今日は見学と言うか入部届けを出しにきたので。」

「え？」

「え？もつ？」

入部すると言う僕を、サッカー部に誘つてきた茜井が驚くのはわかるとして。

海棠先輩も目を丸くするのはなんだかおかしい気がした。新入部員が入るつて言えば普通驚くよりも喜ぶと思うのだが。だが、気にせず僕は入部届けが入っているはずのポケットに手を突っ込んだ。

「ええ！僕、高校では野球するつもりだったから。入部届けも既に書いて…あれ？」

昨日出し損ねた入部届けは出した覚えがない以上ここにあるはずだった。が、出てこない。

「あれ？ない！？確かにここに入れていたのに!？」

昨日届けを出そうとして教室を出たところまでは確実にあった。一体いつ落としたのだらう。まあ、名前と部活名かいただけの紙だし、また先生にプリントもらえば済むことなんだらうけど。

「…すみません。ちよつと、失くしてしまつたみたいです。」

うう、これじゃまるで社交辞令で入部考えてる、と言つたみたいだ。気まずい。

「いいよ。いつでも。じっくり考えてくれていいから。」

嫌な顔一つせず笑ってくれる海棠先輩。優しい人だなと思う。こういう人の下で練習するのもちよつと頼りない感じだけど、悪くはな

いかもしれない。

だが、その印象を次の言葉で一気に変わった。

「それに、一時の興味だけで高校の部活選ぶと後悔するし。中学のときに陸上やっていたなら、陸上部も見学に行ってみたらいい。」
笑顔のまま、海棠先輩がそんなことを言う。ん？なんかおかしくないか？

「…それでは、まるで僕達に野球同好会に入っただけじゃないって言うているように聞こえるんですが。」

海棠先輩は笑みを崩さず、まさかと笑ってみせる。

「いや、そりゃ。入ってくれるなら嬉しんだけどさ。君みたいに運動できそうな子がうちみたいなの弱小部、それもチーム競技の部活に入っても面白くないんじゃないのかな、と思っただけ。」

「そんなことないですよ！僕、高校に入ったら絶対甲子園目指そうって決めてましたから！」

まあ、明確に言えばそれを口にしてたのは我が兄なのだが。

しかし、僕の言葉になぜかその場にいた皆が、ムカつくことに茜井さえ動きを止めた。

なんなんだろう。なにか僕はおかしなことを言ったか？高校で野球やっていて、甲子園目指さないなんてあり得ないだろう。

「…小野寺。お前さん…。ぶっ！」

なぜか、長井先輩が大声で笑う。僕は呆気にとられたが、すぐにバカにされていると気付いて長井先輩を睨んだ。

「…なんで、笑うんですか。」

「いや、だって。有り得ないでしょ！うちの部その目で見て、甲子園って。」

笑いの収まらない長井先輩に懨然として、誰か助け舟をくれないかと思ってみるが、皆一様に困ったような、面白くもない冗談を聞いたような顔をしていた。

篠崎先輩が、そのご尊顔に呆れをすっかり貼り付けて難しい顔をした。

「それって。チーム数にも満たない部員しかない部で言う台詞？
逆にいやみに聞こえるんだけど。」

「…そんなつもりはありませんよ。」
不機嫌そうな顔を向けられ思わず怯むと、今度は横の山田さんが気の毒そうな顔を向けた。

「小野寺君。君がどういうつもりで柏原で野球をしようと思ったのかは知らないけど、そもそも、野球同好会だって主将の代で作ったクラブなのよ。元々柏原に野球部はないの。だから高野連にも加盟していないから甲子園出場も出来ない。」

「なっ！」

そんなことは聞いていない。高校の野球部であれば、どんな野球部でも出られると思っていたのに。

「それになまじ人がいて、高野連に加盟していても柏原みたいな高校に甲子園に出場できるだけの選手はいないわ。」

「む…そんなのやってみなきゃわかんないじゃないですか？」

僕の台詞に溜息が漏れた。海棠先輩だ。頼りなさげな風貌を困ったように眦を下げてこちらを見ている。

「やらなくてもわかるよ。野球同好会は弱小部だ。作った俺が一番わかってる。小野寺君。もし本当に君が甲子園を目指すために柏原に来たのなら。」

気の毒そうな顔をしながら海棠先輩は、だが容赦なく言い放った。

「君は来る学校を間違えていないか？」

第九話 野球同好会2（後書き）

小説を書くときよく音楽聴いています。

これを書いているときは鬼塚ちひろの「月光」。

まったく作品にあいません（^^；

第十話 広報準備

野球同好会に見学に行った翌日。暖かな春風が吹き込むうらかな昼休み。

桜を望む印刷室に僕は清ちゃんと一緒にいた。

「な・に・が！」「君は来る学校をまちがえてないか。」「だー！」

僕は輪転機を回しながら悔しさに雄たけびを上げた。

「きゃあ！つなんですよ！巽。突然大声を上げて。」「

僕の声に驚いた清ちゃんが、床に大量の紙をばら撒いてしまっていた。

「あ、ごめん。」「

慌てて拾うのを手伝う。

「…もしかして、また思い出し怒りしていたんですの？」「

散らかした紙を纏めながら清ちゃんが聞いてくる。

「…まあ、ね。」「

その後、僕はあの自分たちを弱小部と呼ぶ彼らに啖呵を切った。曰く。

「『貴方達に甲子園を目指す気がないなら僕は新しい部を立ち上げる！』なんて大層なことを言っただけなんですのよね？」「

「うっ…。」「

なんだか殺気を感じた。

「清美…。お、怒ってる？」「

「おほほほ。まさか。」「

目が据わってるよ。こわいよお。

「時間が限られていると言うのに、遠回りな道を選ぼうとするあなたの特性などわかってますのよ。ええ、わかっていますとも。」「

うっうっ。やっぱり怒っているよね。だってただでさえ半年の時間は少ない。いくら弱小と言っても彼らは経験者。これから部を起そうとするより、彼らの部から人数の募集をかけて人数集めて、練習

したほうがはるかに早い。一から部を起すなど愚の骨頂だ。

「わかつてる。…でも、あの人たちとたとえ甲子園目指したところで、だめな気がするんだ。」

最後の一枚を拾い終えて、立ち上がりそれを机の上で綺麗に整える。それを見ていた清ちゃんが不思議そうな顔をした。

「…一体何が不満でしたの？」

「え？」

「お話をうかがっている限りでは、あながち相手の方々が悪いことを言っているとは思えません。少々、現実を見すぎて怖気づいている気がしますが、行っていることは至極まとも。発破かけるなり、何なり援助して差し上げれば、それなりに働いてくれるとも思えませんが。」

清ちゃんの言うことはわかる。そう、彼らは至極当然、まともなことを言っている。むしろ一柏原（この学校）で甲子園を目指そうなんて無謀な夢をほざいているこっちの方がおかしい。僕は纏めた紙を清ちゃんに渡しながら溜息をついた。

「僕だって、彼らが悪いとは思ってないよ。むしろ、すごいと思っている。自分を弱いとはつきり認められるンだから。」

スポーツ選手というのは得てして、自信家が多い。根拠のない自信を持って、慢心し鍛錬を怠ったりして、それを他人のせいにする。やれプレッシャーに負けたのなんだの。そうじゃない人もいるけど、自分たちを弱いつて認めることは別に悪いことではない。その分努力することを覚えるから。決して慢心することなく。でも彼らはそれとは違う。

「自分たちがいつまでも弱いままだと言うことを許量してしまっている彼らを僕は許せない。」

「現実を見ているとは考えられませんの？」

「それもあるけど、努力なしに諦めているのが伝わっているんだよ。きつとあの人たちと一緒にやっても本当に弱小部だけで終わっちゃう。」

「今後に期待とか？」

「時間がないんだよ。」

それが最大かもしれない。ともかく士気のない彼らを夏までにどう
こうできる自信がない。もちろん、時間がないというのは完全な僕
個人の我侷でしかない。それに彼らを巻き込むのは違う。

「…それにさ。」

僕は印刷室の窓に近づいた。印刷室の前には桜の木があって、散り
行くその花びらが緩やかな春風とともに迷い込んでくる。僕はその
一枚を手を伸ばして空中で受け止めようと手を伸ばした。
くるくると花びらは舞う。

桜の下、白いボールが弧を描く軌跡が思い浮かぶ。

彼らの笑顔。ただのキャッチボールに過ぎないのにとっても楽しそ
うだった上級生。

箱庭のようだと思った。とつても楽しく綺麗な空間。彼らだけの場
所。

彼らにとって野球とはきつと楽しいものだ。勝負とは無縁、甲子園
なんて目指さなくても十分楽しいスポーツだ。

中空を待っていた花びらはそつと最後に狙いあまたず僕の手の中に
落ちた。僕はそれにそつと、触れる。

「僕が目指すのは無茶なこと。生半可な練習量じゃいられない。な
かよしこよしの馴れ合いスポーツやってる人に耐えられるわけがな
いじゃない。」

僕はそつと花びらを手のひらから落とした。ひらひらと花びらが手
のひらから零れて落ちていく。

「…異。」

「異　　！」

清ちゃんの声にかぶさるように名前を呼ぶ声が聞こえたかと思うと、
廊下に通じる扉が勢いよく開けられ、茜井が顔を出した。

「お、ここにおったんか…って。あ、女王様もいはったん？」

「…お前は…！」

突然入ってきた茜井に清ちゃん顔がこわばる。そう言えば、スカート覗かれた被害者と加害者の関係だったか。茜井はそれに気づいたのか僕が何か言う前に、清ちゃんの前に歩いていき。

「昨日はすまんかった！堪忍してや！」

ぺこりと謝った。呆然とする清ちゃん。僕もちよつと驚いた。

「え？」

「…どういう風の吹き回しさ。」

「いや、巽と一緒にいるんやったら、女王様と対立しとったらあかんからな。」

にこやかにとんでもないことを言われた気がする。

「…なんだそれ。どうして僕がお前と一緒にいなきゃいけないんだよ？そいでもってどうしてここにくるわけ？」

「ひどっ！友達やん！冷たいな！チラシつくったたのに？用が終わればぽい？ひどいわ！極悪男〜！」

茜井が泣きまねでわめく。うつつうしいな。

「え？これってこの痴漢男作ですか？」

清ちゃんが手元の印刷物を見て純粋に驚いた。

それは今印刷室で刷っていたのは野球部の部員募集チラシだ。

僕が昨日家で作ったものを原稿にして印刷しようとしたら、茜井が偶々それを見て、「こんなあかん」とかのたまつて無理やりコンピュータ室のパソコンで作り直したのが今の原稿だ。スタイリッシュユでカツコイイ感じのチラシ。これをものの数分で作り上げた。意外な茜井の特技だ。

「おー！せやで！あんまり巽の美的センスがなかったから俺が作成したんや！見てみい！これが一番最初の原案や。鉛筆で殴り掻いたようなん。幼稚園児でももう少しまともん作ってくるで。」

「うっわ〜。」

ぴらりと茜井が取り出したのが、僕の元案。清ちゃんが盛大に顔を顰めている。

幼稚園児って。そこまで言うか？失礼な。

悪かったな！どうせ美術の成績は万年1だよ！くそっ！

「巽…。流石にこれはあんまり。痴漢男ので正解ですわね。」

「せやる…、ってか、俺の名前は痴漢男やのうて、茜井やん。そう呼んで…って、だ！」

僕は喋り捲る茜井にけりを入れた。

「うるさいよ。茜井。それより何でここにきたの？別にお前を呼んだ覚えはないよ？てか何で勝手に名前呼び捨ててんの？」

「た…相変わらず無体やな。ま、許したる。友達やからな。」
ぐつと親指を立てる茜井の手を叩く。

「質問に答える。質問に！」

「えー。そんなん答えんの？どっちも友達やったら当たり前のことやん。」

「いつからお前と僕は友達になつたんだ？」

「友情に時間が必要あらへんのやーん。」

「死ぬか？」

ぎりぎりと襟首を締め上げる。茜井の顔が白くなり始めたくらいに流石に清ちゃんか止めに入る。

「巽。気持ちはわからないではありませんけど、流石に殺人はよくないわ。」

「清美…でも！」

「この男の命などどうでもいいけど、巽の経歴に傷がつくのは私耐えられせんわ！」

「…清美！」

「げほっ！ひどいわ！お前ら！」

茜井が流石に本気で涙目で突っ込んでくる。本気なわけないじゃないか。

「冗談やーん」

二人で言うと、流石に本気で茜井が泣いた。

第十一話 友達？

キンコンカーンコンとやや間延びしたチャイムが鳴り響く。放課後、僕はその音とともに立ち上がった。

鞆は既に前の休み時間の間につめてあったので問題はない。鞆を持つてすぐに教室を出た。

「おい。待ってや。巽！」

なぜかその背を茜井が追ってくる。

「なに？急いでんだけど？」

「ピラ撒きに行くんやろ？俺も手伝うわ。」

茜井の言葉に驚いて思わず立ち止まる。思わず茜井の顔をまじまじと見てしまう。

「なんで？お前、関係ないのに。」

サッカー部に入るといつていた茜井。これは野球部員を募るピラまきだ。茜井には関係がない。純粹に驚いていると、茜井がため息をついた。

「冷たいなあ。友達やゆうたやん。友達手伝うのに理由なんていらへんのちゃう？」

笑う茜井を不思議に思う。

「…なんで？」

正直に言えば、結構、いやかなり茜井にはひどい扱いをしていると思う。それなのにこいつは僕を友達だと言う。

「…なにが目的？」

茜井はずっと邪険にしているのに僕の後をついて回る。なんで？初対面の相手におかしなことだ。足蹴にされても近づきたいなんて魅力が僕にあるとは思えなかった。

「清美？」

…清ちゃんに取り入るためかと考えた。今の僕はこの学校で清ちゃんに一番近い場所にいる。この学校で一番権力を持っているといわ

れた清ちゃん。

僕はその権力を利用して。だから、その甘さを知ってる。その権力を欲する人間は他にもいるだろう。

彼女と親しい僕を介して茜井が狙っていないと言う保証はない。僕は彼女の権力頼っている分、彼女を守らなければならぬ。

純粋な好意を信じられない僕は醜い奴だと思う。胸がずきといたんだ。

だが、そんな様子の僕に茜井はキョトンとした顔をした。

「女王様？なんでそこで女王様の名前が出てくるんや。」

「…だって僕に近づいてもお前、得なんか…。」

視線を剃らせて、もごもご言つと、何か察したように茜井が肩眉を跳ね上げた。

「あ！お前、俺が女王様の権力欲してお前に近づいたかと思うとんやないやろな！」

考えてたことそのものずばり言い当てられて、僕は恥ずかしくて茜井と目線を合わせないように勤めた。

「だって、それしか考えられないんだけど。」

「かー。本気で友達甲斐のないやつちゃ！大体！俺がお前に話しかけたの、女王様との関係知る前やったやん！女王様は関係ない！」

あ、そう言えば。あの痴漢事件の前から茜井は僕に話しかけていた。それに思い当たった瞬間、茜井の顔がそれ見たことかという顔になった。

「まあ、最初に近づいたのは、お前とおると女子に騒がれやすいという下心があったからやというの認めたる。」

「は？」

思わぬ回答に眉根を寄せる。なんだそれは。

「鈍いなあ。お前入学式のときから延高とクラスの人気を二分にするくらい女子に騒がれとつたんやで？」

笑いながら、長身で女みたいな面やからな、と茜井は僕の顔を指差す。まあ、顔が女っぽいのは女ですからな。でも騒がれるほどの容

姿ではないつもりなのですが。

「お前は自然と女の視線をひきつけるから、高校でもてたいおれとしたらお前と一緒にいると女も寄ってくる率が高まるんじゃないかと思っただけや。だから、お前に邪険されても近くにいたんや。同じクラブに誘ったのも同じ理由。」

サッカー部に特に思いいれはないと茜井がいう。ただ単に、校内で一番強くて女の子に人気のありそうな運動部ということで誘っただけらしい。サッカー経験もないそうでなんじゃそりやといいたくない。

「…それなら僕じゃなくても、延高でも良かったんじゃないのか？僕が人気者だという件は信じられないが、それを信じたとして人気を二分にしていた延高が茜井にとってターゲットにならなかったのか、純粹な疑問だったのだが、茜井は顔を顰めた。

「そりや、延高でも効果はあったかも知れんけど、なんか近づきたくなかった。あいつ変態臭いし。」

頬の感触を思い出し、思わず背筋が寒くなる。確かに。

「それじゃ、僕は誘蛾灯なんかですか？」

無然とすると、茜井が笑う。

「ま、最初はそう思うとつたな。」

笑う茜井の顔をじっと見る。

「最初、と言うことは今はどんな理由？」

聞くと茜井はいたずらが成功した子供みたいに笑った。

「面白いから。」

「…？」

意外というか、良くわからない答えに僕は眉根を寄せた。だが茜井は気にせずに続ける。

「ま、お前は確かに足も手も早いわ。最初は乱暴者やとも思っただけ。せやけど、一緒にいるとあきへん。おもしろい。」

面白い。そんな理由。清ちゃんのことを理由じゃなかった。呆れて、脱力した。

「僕は娯楽映画と同じ扱い？」

「一緒にいておもしろいのは友達の条件とちゃうん？」

茜井が拳で僕の肩を軽く押す。じゃれあいのようにでくすぐったかった。

僕はあの事故以降、巽として生きることすら望んだ。その分中学のときの、勝美としての友達とは疎遠になって一度も会っていない。それは僕が自ら望んだことだから。それを不満に思ったことはなかったけど、どこかさびしく思っていたのは確かだったのかもしれない。

高校に入っても半年しかいられない場所にあんまり思い入れを作ってもしんどいだけだ。自然に他人と距離を置いていた。だから、必要以上に茜井を邪険に扱っていたのかもしれない。それに今気づいた。茜井に気付かされた。

固まっていた心にふわりと暖かな風を感じたようで、でもそれを与えてくれたのが茜井ということがなんだかくすぐったくて、僕は自然と笑っていた。

「じゃあ、友達ならこき使ってもいいよね。」

「っ！」

茜井の顔が青くなる。なんでかな？笑ってやっってるのにその反応は？ム力つくなあ。

「なんやそれ！俺はお前の奴隷ちゃうで！」

「奴隷なんて言っただけじゃないか。友達だろう？友達？茜井は僕の友達だから文句も言わず一生懸命、献身的に尽くしてくれるんだよね。ああなんかいい響きだね。ふふふふ。」

「な、なんかお前怖い。延高より。」

失礼な、あんな変態より怖いってどうということ。

「まあ、いいや。で？ピラ配り手伝ってくれるんだろ？さ、清美を待たせてるんだ。急がないと。」

僕が歩き出すと、独り言みたいな小声で茜井の声が耳に入る。

「俺、友達選びに失敗したんとかちゃうやろか？」

もう遅いよ。茜井。

「置いていくぞ！早く！」

「あ、待ってっ！」

僕達は廊下を待ち合わせ場所に向かって走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2011f/>

プレイボール プレイゲーム

2010年10月9日15時07分発行